知的プラットフォーム推進全国フォーラム

設立総会

2024年3月31日

代表挨拶および趣旨書案説明

代表挨拶

加藤孝明

これまでいろんな議論をしてきたのですが、こういった知的プラットフォームと言われるような活動というか…議論する場ですね、今の時代こそ必要だという認識になって、今日に至っているという風に理解しています。

明治維新が 1868 年で、ちょうどその後、80 年後ぐらいに終戦を迎えて、終戦から今がちょうど 80 年ぐらいになる。その間、劇的に日本社会はその都度こう変化をしてきたわけですが、明らかにここ 20 年、30 年時代のトレンドが変わって、本来ならばある意味劇的な変化をしなければいけない時代に入ったにも関わらず、自分自身も含めて、その不連続性になかなか気づかなかったというのが今の日本を取り巻く時代感覚かなという気がしています。

そろそろきちんと、ある意味不連続な時代の転換点において、日本社会の不連続にある意味モデルチェンジというか、違う形の成長をしていかなければいけないのかなと。そのためには、表層を慣れている、あるいは短期的な視点に出すのではなくて、その日本社会、あるいは世界の中にある様々な意味での地域というものを、この状況をのせて、それを横に繋ぐことによって、今後の方向性というものもきちんと考えていかなければいけないのかなと。そのためのこのプラットフォームを議論できるかと。あるいは知識を混ぜ合わせて総発していく場が必要だということで今日に至ったと思っております。

この間、様々な方々と議論し、難しい議論から身近な問題まで様々繰り返しまして、こういう箱を作っておくということが今後の日本社会あるいは世界に対してプラスの効果をもたらすだろうということで今日に至りました。今日スタート地点ですので、今後どのよいに進めていくのかを、皆さんと議論できるといいかなと思っております。

共同代表という形になっていますが、私は年齢的にはアドバイザリーボードに入っているのではないかと…ワンポイントリリーフ的に私が代表ということで、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

代表挨拶

金田賢哉

本郷飛行機の金田でございます。私も同じく共同代表ということで、加藤先生からは今プレッシャーを頂きましたけれども、私も会社も始めて、もう 16、7 年過ぎまして、特に海外志向と言いますか、ずっと IT とかベンチャーの世界では、どうしても国内で仕事しにくいという風に感じることがたくさんあり、もう海外でやってしまえという風になってきます。新しい技術とかアイデアとかいうのがどんどん社会実装されて、海外ではたくさん見てきて少しは自信にもつながったわけですけれど、一方で、足元の日本を見ますとなかなか進まない。もちろん様々な理由があることは知った上ですけれども、それでもなおもったいないなという風に思うことがたくさんありました。

特に、大学の理系で研究している方々は感じることだと思いますけども、最先端の研究はなかなか社会に出ていかない。研究だけのための研究であって、予算があるけれども社会実装されるわけではなく、先生方も、もはや社会実装を目指していない、そういった現実がたくさんあるように思います。

でも、実際にはその中にはたくさんの、理系に限らず、文理共に技術やアイデアというものは世界を良くする、できるものがたくさんあると思います。日本は、経済が衰退してきているとはいえ、世界ではまだまだトップクラスのポジションを持っていまして、そういった国が新しいコンセプトや、日本の新しいアイデンティティを主張できるようなことができるような時代になったらいいなと、と思っています。

そういった中で、若手を中心に、と言っていただいておりますけれども、幅広く日本を良くしたいと思ってくださる方々が横に繋がって、足りない部分をきちんと補い合えるような、高度経済成長で通産省が自動車業界でやったように、皆さんが力を合わせて、意見をたくさん出し合って新しい未来に開けるような組織になればと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

趣意書(案)コメント

長沼伸一郎

今一番日本にとって重要なのは、今まで日本は、いわゆる悪く言えば二番手商法で生きてきたわけですよね。とにかく、欧米で新しいものが生まれたならば、それを質の高い労働力で分散して、それでやっていくと。それで、やっぱりこの方法が結構、戦後はかなり有効で、それで電気製品とかその辺はアメリカで生まれたものであるにも関わらず、日本の方が質が高くて安いということで世界を席巻したわけです。

ところがもうこの周辺にありますように、今の中国とかが、今の産業は部品が世界中で共通化されていますから、部品を集めてくれば世界中どこでも作れてしまうと。そういう状況が生まれていまして、例えば電気自動車は、昔の自動車なんかとは比べ物にならないぐらい新興国が質の高いものを生みだせるようになっているわけですよね。それで日本の優位というものが全部崩れてしまって、そもそも今まで日本がやってきたところでは…今まではともかく日本しかキャッチアップができる勢力はなかったものですから、日本の少ない人口ででも、結構それをやっていくことができたのですけども、今は中国とかそこら辺の、インドとかのもう大変な人口が、同じだけのキャッチアップ能力を備えてライバルとして出てきてしまったと。そうなると、頭 1 つ突き抜けるための重要な戦力が今の日本にはないと言っていいわけですね。

だから、こういう状況になっていると、総体的に少ない人口になってしまった日本としては、欧米の後ではない、新しいアイデアを、独自のものを使って、それで一種のアイデアの点でトップを走っていくと、そのことを行うしか方法がない。いまそういう状況に置かれているということが、今が歴史的にはいちばん番大きな転換点を迎えると言っているいちばんの根拠だと思います。

ところが今まで日本はそういうことやったことがないわけですよね。学問そのものは、欧米に留学して、欧米の最新鋭、最新の論文を、それをキャッチアップして、それを向こうの学会に評価してもらうと。そういう格好でできていますから、日本の中で生まれたものを日本で広めていくと、そういうシステムが全く存在していないと言っても過言ではありません。こういう状態で主導権を取っていこうと思っても、これは絶対にできないのです。これは産業だけにも留まらず、何か新しい産業が起こった時は、その生産なりサービスなりをどうするかというルールが必要になりますよね。そのルール自体も設定、制定する能力を失ってしまうと。だから、ものの生産で優位に立てないだけではなく、ルールを作る状態でも優位には立てないと、そういう深刻な状態に置かれているわけですから、それをなんとか自分の、日本で生まれたもので、それで日本が世界にリードしてやっていくと。そういうものを作る新しい制度というものがどうしても必要になってしまうのです。

それをやるためにはどうすればいいかというと、普通の処方箋に従うと、とにかく欧米の 1 番最先端の論文を持ってきて、それに予算をかけて量産することだというように思いがちなのですけども、実は人口では、日本はアメリカの半分なわけですよ。アメリカの方が先んじて英語を使っていますし、明らかに優位にあるわけですから、それでやっても勝ち目がないということは明らかですね。

こういう場合にいちばん有効な方法論というのは、実はその最新の情報をむしろ絶ったグループというものを作ることの方が結構有効に機能する場合が多いことがあります。そういう場合、新しい情報を絶って新しいものを作らなければならないということですから、アメリカの影響あまり受けない状態で何か考えなきゃということを強いられますと、意外と新しいことが生まれることが多いです。そういう場合にいちばん頼りになるのは、アメリカをはじめ近代欧米が見落としてきた古典とかそういうものの古い知識の中に、そういうもののヒントが隠されていることが多いのです。

ところが、そういうもの…そんなものに議論していたら競争についていけないだろうと、技術の点ではついていけないだろうということで、普通のビジネスの現場ではオミットされてしまうことが多いわけですよね。そこをコスパとかそういうことに囚われるのではなくて、熟議をして、そういうところを、むしろ古い知識をみんなで本当にこれは使えないものだったのかと、そういうことも含めて新しい観点から議論をしていくと、そういう熟議によって新しい、欧米ではない独自のものを作れる可能性が高いと言えるのです。

その際に、若い世代がそれを担うことは、単にこれからの主役が訓練をするというばかりではなく、若い世代というのは、2 番手商法と成功体験をあまり持たないんですよね。ですから、今まで、もうその成功体験を抜くというのは組織にとって非常に難しいことでして、それをやるっていうことは普通ではできないですけれども、むしろ若い未経験な世代を中心にすることで、成功体験がないまっさらな状態から全く新しいものを作り上げていくということができるわけですから、これは一般のビジネスの現場ではなかなかそういうことはできないわけです。だから、そういうことをできる組織を作るということは、非常に意味のあることではないかと考えています。

また、文理融合ということは、結構これは世の中全体でも言われているのですけども、これも実際にやってみると結構難しいことが多いですよね。日本は特に遅れていますけども、これは日本だけの責任ではありませんで、結構アメリカでも過去に、クリスをはじめ名だたる研究機関が膨大な予算かけて学生研究の試みをやろうという、そういう大プロジェクトを打ち上げて、鳴り物入りでやったことがあるんですけども、それは結局全部失敗してしまったと。それはやっぱりなんやかんや言っても、専門家を集めてきてその話をさせるということで、お互いの間の連携が取れないっていう…そういう共通した弱点を抱えていたわけなんです。だから、こう

いう場合はあまり専門家を集めるのではなくて、むしろ未経験の人を集めて、それで多くの分野で連携を取ることを考えた方がむしろ近道であるということが言えるのではないかと思うわけです。そのためにも、その若者を主体にしてそういうユニークなことをやっていくと、そういう組織を作ることは非常に有益なのではないかと思います。

必要とされるのは大体そういうアイデアで、こういったことは今まで意外に無視されることも多く、表面的な効率、表面的な情報のコスパということで脇に追いやることが多かったのです。逆に言えば、アメリカといえどもこういうことはやってこなかった。盲点に当たっているわけですから、その盲点をつくということは一種の主効果を持つことになって、勝ちに進めるチャンスは普通の組織よりも大きくできるのではないかということを期待しているわけです。

逆に言うと、今までは日本は必要がないからそういうことをやらなかったわけですから、2 番手商法でいいよと。2 番手商法で間に合っちゃう、だから、こういうことはなかなかできなかったわけですよね。2 番手商法でいる限りは、いくら経済的にそこそこ反映したところで、やはり一種の属国で終わってしまうと。今この危機をむしろ積極的に逆手にとって、一種、知的な独立を達成するための契機にしようではないかと。そのための最も有効な組織としてこの知的プラットフォームを活用するということを考えたいというのが、この設立の趣意であります。